



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	08-28-西体-15 幼児におけるラダー運動の成就度および走能力への貢献度の性差について(08.測定評価,一般研究発表抄録,ひろしま発 ひとを育む体育・スポーツ)(本文(Fulltext))
Author(s)	宮口, 和義; 出村, 慎一; 春日, 晃章; 松田, 繁樹; 青木, 宏樹
Citation	[日本体育学会大会予稿集] vol.[60] p.[205]-[205]
Issue Date	2009-08-26
Rights	Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences (一般社団法人日本体育学会)
Version	出版社版 (publisher version) postprint
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/40664

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

08-28-西体-13

項目反応理論によるマット運動能力の達成度評価基準

○井上真理子、安藤梢、西嶋尚彦（筑波大大学院）

【目的】子どもの体力・運動能力の向上を評価するためには、新体力テストによる運動能力評価に加えて、体育での運動成就により発達する運動能力を絶対評価する達成度評価方法が必要である。本研究の目的は、項目反応理論を適用して、小学校体育のマット運動単元での運動成就から、マット運動能力の達成度評価基準を分析することであった。【方法】小学4年生から6年生の男女260名を対象とした。学習指導要領に準拠した器械運動領域のマット運動10種目について、内容的妥当性と局所独立性を満足する12テスト項目を構成し、運動成就を自己評定した。四分相関行列による因子分析のスクリープロットからテスト項目の1次元性を分析した。バイズ推定法を用いてテスト項目特性値を分析した。テスト項目の2PLMへの適合性、項目特性曲線（ICC）、困難度、識別力、能力値の不変性、項目情報量関数（IIF）、およびテスト特性曲線（TCC）、テスト情報量関数（TIF）、テストの精度を分析した。【結論】項目困難度に基づくマット運動能力の達成度評価基準が構成された。

08-28-西体-14

SDA法を用いた片脚立ちの重心動揺評価

○中嶋風太、中村勇、魚田尚吾、出井章雅、今西平（大体大大学院）、梅林薫（大体大）

重心動揺の分析法としてStabilogram-diffusion analysis法（SDA）が新しい手法として注目されている。本研究は、このSDA法による重心動揺評価を簡便に実施することが出来るFitro sway（FiTRONiC社）を用いて、SDA法による重心動揺評価の特徴を探ることを目的とした。被験者には健常な大学生6名（年齢：18—22歳、男子：3名、女子：3名）を用い、片脚立ちによる重心動揺評価を行なった。測定は、同じ被験者につき同様の方法で2日行ない、その級内相関を求めることにより測定値の再現性を分析した。その結果、SDA法において身体が重心安定期に至るまでに要する時間を示した値（Critical time interval）については、日を改めた場合にも被験者内で高い相関が得られるのに対し、重心動揺が安定しプラトー状態になった際の動揺性を示した値は測定機会によって一致した値が得られないという特徴がみられた。

測

08-28-西体-15

幼児におけるラダー運動の成就度および走能力への貢献度の性差について

○宮口和義（石川県立大学）、出村慎一（金沢大学大学院自然科学研究科）、春日晃章（岐阜大学）、松田繁樹（岐阜聖徳学園大学短期大学部）、青木宏樹（金沢大学大学院）

本研究の目的は、幼稚園児626名（男児：297名、女児：329名）を対象に、ラダー運動の成就度および走能力への貢献度の性差を検討することであった。著者考案の幼児用ラダー（全長400cm 1コマ/35×35cm）を使用して運動要素および難易度の異なる9種のラダー課題を1カ月間練習させた後、成就判定テストを実施（巧拙レベルを4段階で評価）した。年代別（年中・年長）に成就度の性差を検討するとともに、年長児については走能力（25m走）への貢献度も検証した。横向き走、両脚開閉ジャンプ、スキップ、シャッフル、およびサンバステップの成就度に性差が認められ、いずれも女児が高値を示した。特に、スキップの動作獲得は女児の方が早いことが示唆された。25m走への各課題の複合的関係を検討するため、数量化I類を適用し検討した結果、男女とも有意な関係が認められ、寄与率は女児26.8%に対して男児39.3%と男女で異なっていた。ラダー課題の習得が走能力向上にも繋がることが示唆された。